

英語多読における多読語数と英語運用能力向上効果との関係

(豊田工業高等専門学校) 伊藤和晃, 長岡美晴

1. まえがき

豊田高专電気・電子システム工学科(以下, E科)では, 2002年度に専門科目として SSS (Start with Simple Stories) 方式の英語多読(100万語多読¹⁾)を本科5年に導入し²⁾, 2004年度には本科2~5年, 専攻科1, 2年の6年間のカリキュラムを構築するに至った。また, 2004年度からは一般科目としての英語でも, 一部の科目では授業時間内に多読指導を行い, 課題として多読を課すなどしている³⁾。

100万語多読では, 読書量の目標として「累積語数で100万語」を掲げているが, これまでの6年間の取り組みにより, 複数の学年を通じて計39名のE科学生がこの目標を達成し, 読書量とTOEICで測った英語運用能力に有意な関係を見出すまでに至った。そこで本稿では, 100万語を達成した学生の英語運用能力について検証することで, 読書量と英語運用能力の関係, および英語多読授業で効果が出る目安となる読書量について報告する。

2. 英語多読授業

酒井によって提唱された100万語多読は, SSS多読三原則(1. 辞書は引かない, 2. わからないところは飛ばす, 3. つまらなくなったらやめる)に基づいて非常に易しい英文から読み始め, YL(読みやすさレベル)でレベル分けされた Leveled Readers や Graded Readers を段階的に, かつ分速100語のペースで大量に読む学習法である。英文インプット量を大幅に増やし, 英語に対する苦手意識をなくして英語運用能力を向上しようという点で, 従来の精読中心の英語授業とは本質的に異なる。

E科では, 学生の英語多読時間を確保する目的で, 本科2~5年, および専攻科1, 2年で, 年22.5時間の英語多読授業を展開している。英語多読授業では, 授業時間のほとんどを図書館での読書にあて, 担当教員の助言の下で学生個々の読書量や嗜好に合わせた英文を選ばせて, 日本語に翻訳することなく大量の英文を読ませている。また, 授業時間のみでの英語多読では, 年間10万語程度の読書

量となり, 6年間のカリキュラムでは到底100万語には到達しない。そこで, 授業時間外での多読を積極的に推奨し, クラスの読書量を学生に公開す

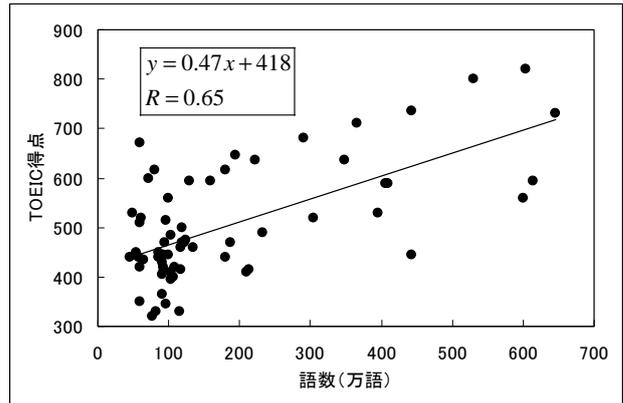
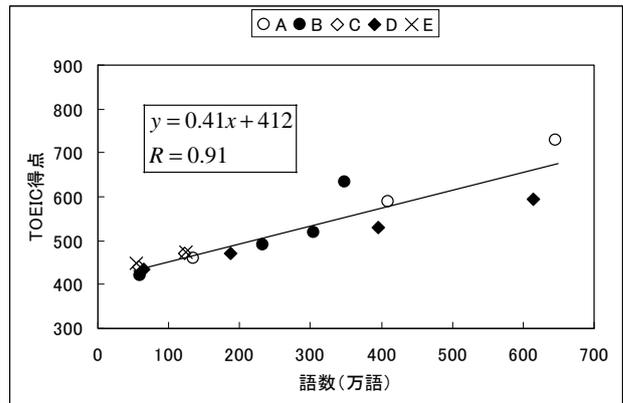
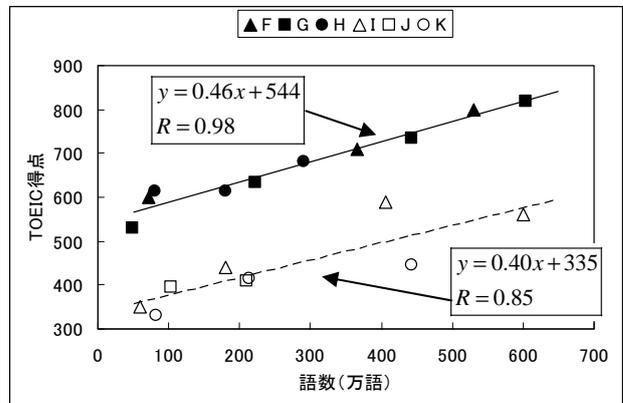


図1 100万語達成者の累積語数とTOEIC得点の関係



(a) 初回受験時の得点が400点台の学生



(b) 初回受験時の得点が300点台および500点以上の学生

図2 多読授業による英語運用能力の向上

るなどして学生の読書意識を向上させるよう工夫を凝らしている。このような6年間の取り組みにより、100万語を達成するE科学生は39名を数え、中には600万語を達成する学生も出てきた。

E科学生は、豊田高専全体で開催するもの、E科単独で開催するものを合わせて、校内で年3回程度TOEIC-IPテストを受験する機会があり、毎回のテストで多くのE科学生が受験している。そのため、英語多読授業での読書量とTOEIC得点との関係を多くのデータから検証することができ、これまでも数々の報告をしてきた⁴⁾。以降では、100万語を達成した学生に着目し、その英語運用能力との関係について検証する。

3. 100万語達成者の英語運用能力

3.1 100万語達成者の英語運用能力

100万語の読書量(累積語数)を達成した39名の学生のうち、英語圏への留学経験者3名とTOEIC未受験者4名を除いた32名を対象に、TOEIC得点と受験時点での読書量(万語)の関係を図1に示す。32名中20名の学生が複数回受験しており、のべ64点のデータとなっている。この結果、我々が実践上の目標とする30万語(やさしい英文図書の読書速度が上昇し、学生の多くが読解力の向上を実感すると答えた読書量)の読書量⁵⁾で、平均400点程度のTOEIC得点を期待でき、100万語の達成により、TOEIC450点程度の英語運用能力を獲得できることが分かる。一方、同程度の読書量でも200点以上の差が出ている。そこで、学生個々の継続的な英語多読による英語運用能力の変化について次に述べる。

3.2 英語多読による英語運用能力の向上

継続的な英語多読による英語運用能力の向上効果を検証するため、TOEICを複数回受験した20名のうち、初回受験時から最終回受験時までになくとも50万語以上の読書量を上乘せした11名を対象に、TOEIC得点と受験時点での読書量(万語)の関係を図2に示す。図2(a)は初回受験時のTOEIC得点が400点台であった5名(A~E)、図2(b)は300点台であった3名(F~H)および500点以上であった3名(I~K)の結果である。各図中に示す回帰直線より、初回受験時のTOEIC得点に関わらず(多読授業以前における英語に対する苦手意識の程度によらず)、100万語の読書量がTOEIC得点に換算して40~50点程度の英語運用能力の向上に寄与していることが分かる。おおよその目安として読書量を50万語ずつ増やしていけば、TOEIC得

点を段階的に上昇させることができる。この結果に基づけば、学生に保証するTOEIC得点に応じた読書量の目標値を設定することも可能となる。

4. 運用面での課題

英語多読によってTOEICで測った英語運用能力を向上でき、継続して英語多読を進めることで、更なる英語運用能力の向上効果が期待できることが分かった。また、学生に保証するTOEIC得点に応じた読書量を設定するおおよその目安も明らかとなった。一方で、実際の運用面では課題も残る。100万語の読書量を正規の授業時間内で達成しようとすると、200時間程度をあてる必要がある。現実的にはこれだけの授業時間を英語多読のみにあてることは困難であり、例え授業時間を確保できたとしても、学生の読書意識が低ければ英語多読の効果は出にくい³⁾。そのため、授業時間外での読書量が重要となるが、英語多読に懐疑的、あるいは(和文も含めて)読書そのものが苦手な学生に十分な読書量を達成させることは難しい。授業時間外での読書意識を向上させていく点が今後の課題となる。

5. あとがき

本稿では、英語多読授業で100万語を達成した学生の英語運用能力を検証し、読書量と英語運用能力との関係を明らかにすると共に英語多読授業で効果が出るおおよその読書量の目安について明らかにした。今後は授業時間外での読書意識を向上させる方策について検討していきたい。

参考文献

- 1) 酒井:「快読100万語ペーパーバックへの道」,ちくま文芸文庫(2002)
- 2) 吉岡,西澤:「英文多読による個別自律学習の指導」,pp.65-68,平成15年度高専教育講演論文集(2003)
- 3) 深田,西澤,長岡,吉岡:「高専生英語力向上への道:英文多読指導の効果」,全国高等専門学校英語教育学会研究論集(2008)
- 4) 西澤,吉岡,伊藤:「3年間の継続授業であきらかとなった英語多読授業の効果と成功要因」,工学教育,Vol.56, No.1, pp.72-76(2008)
- 5) 西澤,吉岡,伊藤:「苦手意識を自信に変える,英語多読授業の効果」,pp.439-444,論文集「高専教育」第30号(2007)